HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	池田英俊さんの世界
著者	大濱，徹也
引用	北海学園大学人文論集，26・27：xvii-xx
発行日	2004-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

池田英俊さんの世界

大　濱　徹　也

池田英俊さんは，昨年より癌の治療で国立札幌病院に入院しておりましたが，平成16年2月4日午前4時38分に息を引き取りました。癌であることを自覚してより，日本近代仏教史研究会会長として会務運営について整理し，今後の指針を提示するなど，死を受け入れる準備をなさっていました。病床では痛みもなく，哲子夫人はじめお嬢様がたの手厚い看護を受け，可能な限り原稿を執筆するなどして，己の人生を生きようとしておりました。その輝きは，日本近代仏教史に未踏の鍬を入れ，生を終えるまで論文の構想に思いをはせていた人物にふさわしい気高さがただよう死者の容貌にうかがえます。

私が池田英俊さんとはじめて出会ったのは，昭和41年8月に栃木県奥日光で開催された日本宗教史研究会夏期セミナーにおいてでした。この研究会を場として，現在にいたるまで公私にわたる交わりの歳月を重ねてきました。私は，筑波大学を定年で退官し，平成13年4月からは北海学園大学で職場を共にすることとなり，池田さんの研究にかける思いを日々聞かされ今日に至りました。研究者としての池田英俊の志の高さに心新たとするものが多くありました。また，慣れない北の地での生活を何かと心配って下さいました。ここに故人の生い立ちと学問を紹介し，追悼の辞といたします。

池田英俊さんは，和寒の禅寺・大徳山隆國寺の僧池田夢外，吉恵の長男として昭和4年12月19日に生まれ，旧制名寄中学校にて同窓の千葉宣一さんとの交友を深め，学問への初心をもちました。しかし宗門の子たる運

命にいざなわれ，僧たる資格をとるべく，駒澤大学仏教学部仏教学科に進みます。池田さんは，仏教学を学ぶなかで，肉食妻帯を是とした近代仏教のありかたに疑問をいだき，僧たるべき者に課せられてきた戒律の重さにつきあたりました。この戒律への眼こそは，日本仏教が民を救済する信仰として新たに覚醒する方途をさぐるべく，戒を場とする日本近代仏教史の再構築をめざす初心を定めさせたものにほかなりません。この初心こそは，昭和27年駒澤大学仏教学部仏教学科を卒業後，近代仏教史の先達吉田久一に学ぶべく日本社会事業大学研究生となり，ついで昭和28年4月北海道大学大学院文学研究科東洋哲学科印度哲学専攻修士課程に入学，古田紹欽に師事し，31年3月文学修士となり，同博士課程に進学します。院生時代には「宗門の子」として，いまだ開拓期以来の貧しさのなかで生きる檀家を「寺の若」として訪れる業を重ねるなかで，己の学問を民の場から凝視し，明治開化期を生きた先人への思いをあらたとします。北大大学院時代は，かかる「宗門の子」が負わねばならない業を己のものとなし，民の救済への眼を深くさせる器でもありました。

この間33年12月に澤井哲子さんと結婚。哲子夫人は北海道教育大学旭川校の助教授，教授として長年にわたり保健・看護学の教育研究にたずさわるとともに，北海道における保健看護学の先駆者として社会衛生の分野で大きな働きをされた方です。長女（泉）雅子さんは現在北星学園大学社会福祉学部助教授として，次女典子さんは北海道総務部知事室国際課ロシア室翻訳員としてよき働きをなされています。

池田さんは34年3月に博士課程を単位取得退学し，同研究科研究生を経て，昭和37年4月愛知学院大学専任講師になりますが，39年に旭川女子短期大学助教授として旭川に戻り，同大学の教育運営に参画し，後に学長に就任します。旭川女子短期大学は，哲子夫人の祖父澤井兵次郎が設立した裁縫女学校を母胎として誕生した学校であり，岳父澤井一郎が経営しておりました。それだけに池田さんの短大生活は，岳父の大学をいかに支える

かという重荷に苦しめられながらも，その学問を大地に深く根さしめる器となりました。

平成3年に，昭和51年に刊行された『明治の仏教』（評論社）『明治の新仏教運動』（吉川弘文館）などの成果をふまえた博士論文「明治仏教教会・結社史の研究」を筑波大学に提出され，翌4年3月に博士（文学）を授与されました。同論文は，平成6年2月に刀水書房より刊行され，日本歴史学会の機関誌『日本歴史』をはじめとする関係学会誌で高い評価をえた作品です。池田さんの学問は，明治仏教史研究が自我の解放という近代思想の論理で裁断されてきたことに対し，戒律の意味を問い質し，民衆教化に力をつくしたが故に異端視された大道長安らの足跡に民衆救済への祈りを読みとり，民衆教化をめぐる教会講社の諸活動をあとづける作業をとおし，明治仏教史に新地平を開きました。

この間筑波大学・同大学院兼任講師，北海道大学大学院兼任講師として，日本史特講，仏教学，日本仏教史等を担当。平成11年4月よりは北海学園大学人文学部教授となり，同大学院文学研究科日本文化専攻の設立に参画。日本近代仏教史を中心に，日本文化論等を幅広く講義し，熱心に学生指導に努め，就職委員としては企業訪問に力をつくされました。

学界においては，その誠実な人柄を愛され，日本宗教学会評議員，日本仏教史学会評議員，北海道印度哲学仏教学会常任理事として活躍，平成5年には日本近代仏教の研究者を組織して日本近代仏教史研究会を設立し，初代会長として現在まで近代仏教研究における指導的役割を担い，夏季セミナーなどにおいて大学院生をはじめ若手研究者に発表の場を用意し，その指導にあたるなど多彩な活動をしてきました。こうした学問研究の一端は，平成14年度の科学研究費補助金基盤研究A「東北仏教の社会的機能と複合的性格に関する調査研究」の代表者として，日本の近代宗教に関する第一線研究者を組織した研究活動にもうかがえます。この研究成果は，平成16年度に刊行されることとなっておりますが，その日を見ることなく亡くなったことは口惜しい限りです。

池田さんは，師である古田さんの札幌生活を支え，その学問を全人的に

受けとめた最初の弟子です。ここで育てられた学問は，師古田紹欽の日本仏教論にみる洒脱さにつらなることなく，一禅者として，仏教による救いとは何かを歴史を場として問いつめていく作法でした。それだけに，池田さんの学問には，仏教学・仏教史という学問の論理で裁断し，イデオロギーとしての宗教を論じがちな学問風潮とことなり，己が禅者たる信心の場を確かめるなかに，民衆の救済によせる祈りを問い質し，生身の人間がいかに生きたかを時代社会に位置づけようとした池田英俊の心の軌跡が読みとれます。そこには，「宗門の子」としての宿業に時に泣き，憂いながらも，時代に真正面から向きあって生きた人間のみがもちうる世界が展開しております。病床にあっても己が学問世界をさらに大きく飛翔せしむべく日々励む姿は，癌に侵された身を凝視し，己が人生と真摯に向きあって生きようとした74歳の生涯が凝縮されており，輝いていました。池田さん有難うございました。

池田さん，4日の早朝にあなたの死を奥様より知らされ，窓外を舞う雪煙にあなたの貌が浮かび，斎藤史の歌が頭をよぎりました。

雪微塵となりて散りくる雪濃くて野末はおろか眼前見えぬ

生残りとなりて居りつつ死遅れとならざる境踏みわけらるるか